

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00925

研究課題名（和文）戦前期大阪花街の社会的機能に関する基礎的研究：芸能と社会との関係を中心に

研究課題名（英文）Basic research on social function of Osaka Kagais before World War 2 : focusing on the relationship between performing arts and society

研究代表者

笠井 純一（Kasai, Junichi）

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：80107119

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、芸能と社会との関係を主軸に大阪四花街の歴史を追究し、その社会的機能を明らかにすることであった。

主な成果は次の通りである。大阪花街は第五回内国勸業博覧会を契機に、大阪以外で発祥した芸能を受容した。各花街では東京や名古屋から師匠を招いて芸妓を養成したが、大阪発祥の地歌・地歌舞等の伝承にも努めた。各花街の特色は客層だけでなく、協力者の違いによるものと考えられる。各演舞場は花街と市民の接点となり、社会変化に応じて構造を変えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、この分野の研究史は乏しく、史資料の調査も不十分であった。本研究は北の新地の佐藤家史料を中心に、南地大和屋の芸妓「稽古帳」、肥田皓三氏・橋爪節也氏所蔵史料、公共図書館等所蔵の大阪四花街関係史資料等を調査・分析し、その一部を学界や社会に紹介することが出来た。佐藤家史料については「仮目録」を編集した。

研究面での成果は未だ点描的な段階に止まっているが、これまで漠然と把握されてきた大阪四花街像に、歴史学一般だけでなく建築史・音楽史・舞踊史・美術史等の諸方面から実証的検討を加え、いくつかの橋頭堡を築くことが出来た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to track what kind of social role Osaka Kagai played from the viewpoint of performing arts.

The main results are as follows. (1) Osaka Kagai accepted performing arts that occurred outside of Osaka after the 5th National Industrial Exhibition. (2) Each Kagai trained geiko by inviting masters from Tokyo or Nagoya. In Kagai, the performing arts that originated in Osaka were also handed down. (3) It is thought that the characteristics of each Kagai depend not only on the customer base but also on the differences in the collaborators. (4) Each Enbujo (Theater) became a point of contact between Kagai and the citizens. The Enbujo changed its structure in response to changes in society.

研究分野：日本史学、史料学

キーワード：第五回内国勸業博覧会 大阪春の踊 名古屋西川流 花柳舞踊研究会 田中良の舞台下絵 北陽演舞場
南地大和屋芸妓養成所 佐藤家史料

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

花街は長い間、歴史研究の対象から外されてきた。しかし21世紀に入ってから、歴史学以外の分野で京都花街についての研究が散見する。ただ大阪花街については、歴史地理学からの総括的叙述や、都市史的視点からの松島遊廓研究はあるが、大阪四花街(新町、南地、北の新地、堀江)を対象とする具体的研究は未開拓であり、花街の社会的機能を問う姿勢は認められなかった。

では花街は、歴史学の研究対象となりえないのか。戦前期大阪で『郷土研究上方』誌を刊行し続けた南木芳太郎は、大阪の遊廓(花街)が社会的に大きな機能を有していたと指摘している。南木によれば、それは「上方に繁栄を齎した主動力」であり、政治経済・文化・社会の諸方面に大きな関係を持っていたという。本研究では、南木が指摘した戦前期大阪花街の社会的役割を、実証的に追究しようとした。

大阪花街の研究を困難にしていた理由の一つに、十五年戦争末期の大阪大空襲による史資料の湮滅が挙げられる。本研究の発端は、北の新地佐藤家に残された北陽浪花踊を中心とする花街史料を実見したことであった。さらに故肥田皓三氏や株式会社大林組からの史資料・情報の提供、故竹本住太夫氏・田村富子氏・西川梅十三氏ほかの協力もあり、史資料の基礎的研究に着手することが出来た。

2. 研究の目的

大阪四花街は、近世大坂の経済発展の中で生まれ、近代社会においても都市「大大阪」を支える一大機能を有したと推定される。本研究は、これまで正面から取り組まれることのなかった、花街と政治・経済・社会・文化との関わりを実証的に追究し、その社会的機能に迫ろうとするものである。従来の日本近現代史研究者さえ、社会の底辺あるいは遊興の悪所として否定的に捉えて来た「花街の歴史的意義」を、新視点(芸能と社会の関係)から再検討することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 史資料の調査・蒐集と多角的な検討

佐藤家史料は、「北陽浪花踊」の映像資料(16mmフィルム、1929~31年)6点、「北陽浪花踊」番付30点(戦前普及版23冊、愛蔵版7冊)、その他の番付89点、舞台・衣裳下絵112点、舞台上絵見本帳1点、写真アルバムほか16点、写真・絵葉書475点、佐藤駒次郎宛書信60点、摺物・一枚物84点、その他28点、書籍5点からなり、花街経営者(佐藤駒次郎)のコレクションである点に特色がある。この研究では、
の一部について紹介を行うとともに、「佐藤家史料仮目録」を編集した(その後の追加調査で、一部増補が必要である)。

北の新地以外の三花街(南地、新町、堀江)における「春の踊」番付については、故肥田皓三氏・橋爪節也氏のコレクションに含まれるほか、大阪府立中之島図書館・大阪市立中央図書館をはじめとする公共図書館、研究機関等に所蔵されている。また、時には古書肆でも販売されている。本研究では、これらを閲覧し複写物等を取集するとともに、市販されたものも可能な限り蒐集した。新町・堀江の番付は相当数が集まり、起源の古い南地芦辺踊についても、かなりの点数が集まっている。但し、内容の分析は一部しか行えていない。

新聞・雑誌記事等についても相当数を複写・集積し、一部は研究論文等に引用したが、現時点では未整理の部分が多い。

(2) 研究分担者・研究協力者との意見交換

研究分担者・研究協力者との情報交換は、常時個別的に行うとともに、下記の通り研究会を

開催し活発な意見交換を行った。但し 2020 年 3 月に予定した研究会は、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み延期し、以後はオンライン開催の形式をとった。

○2018 年 7 月 13 日（於笠井自宅、出席者 5 名）

「研究計画と史料の説明」(笠井純一・笠井津加佐)

○2019 年 3 月 26 日（於東京藝術大学、出席者 4 名）

「研究の現段階と研究史料」(笠井純一・笠井津加佐)

○2019 年 9 月 15 日（於笠井自宅、出席者 8 名）

「近世大坂における遊所支配」(村田路人) / 「第五回内国勸業博覧会における「新曲浪花踊」の公演について」(笠井津加佐・笠井純一)

○2020 年 9 月 14 日（オンライン開催、出席者 6 名）

「戦前期大阪花街における地歌舞伝承と芸妓の動向」(笠井純一・笠井津加佐) / 「大阪北の新地 舞踊関係史料 佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信」(笠井津加佐) / 「佐藤家所蔵一枚摺物と北の新地の舞台」(笠井純一)

○2021 年 3 月 30 日（オンライン開催、出席者 8 名）

「応用芸術としての舞台美術 田中良の場合」(田村義也) / 「雑誌『道頓堀』に描かれた大正時代の宗右衛門町」(橋爪節也)

4. 研究成果

研究成果は「研究成果の概要」に纏めた通りであるが、ここでは既発表の成果について、(1). 史資料の調査研究、(2). 大阪四花街の歴史に関する研究、(3). 大阪四花街の芸能に関する研究、(4). 北陽演舞場に関する研究、に区分して、それぞれの内容を略述する。なお、本研究の実施期間以前の研究成果にも一部言及した。また*印を付したものは、学会・研究会における口頭発表を含む成果である。

(1). 史資料の調査研究

佐藤家史料については、実施期間以前に「浪花踊に関する史料調査 佐藤家伝来の浪花踊番付」(笠井津加佐・佐藤恵、金沢大学『人間社会環境研究』28～30号、2014～2015)を発表している。佐藤家所蔵「北陽浪花踊」番付(普及版)の全文をPDFで掲げ、紹介したものである。続いて「大阪北新地浪花踊の新史料をめぐる一考察」*を報告し(笠井純一・笠井津加佐、第66回東洋音楽学会大会報告、2015.11.1、東京藝術大学)その内容を『人間社会環境研究』32号に発表した(「北陽浪花踊の新出史料と大阪四花街「春の踊」の変遷」、2017)。佐藤家史料の概略を記し、史料の中核をなす「北陽浪花踊」等の変遷を辿ったものである。

実施期間内の成果は、「大阪花街・北新地と舞台美術家：田中良 佐藤家史料をもとに」(笠井津加佐・笠井純一、『人間社会環境研究』36号、2018)、「北陽浪花踊映像史料の紹介と研究用資料作成の可能性」*(笠井津加佐、第56回藝能史研究会大会報告、2019.6.2、龍谷大学)、「佐藤家所蔵一枚摺物と大阪北の新地の舞台」(笠井純一・肥田皓三・笠井津加佐、『人間社会環境研究』41号、2021)、「大阪北の新地舞踊関係史料 佐藤家所蔵佐藤駒次郎宛書信(上)」(笠井津加佐・笠井純一、『人間社会環境研究』41号、2021)の4点である。は北陽浪花踊の舞台上絵・衣裳下絵を描いた田中良について、その活動を詳述したもの、は佐藤家所蔵16mmフィルムに映された舞踊「浮世絵」を紹介し、問題点を指摘するとともに、映像を紙上に記すことを試みたもの、

は佐藤家所蔵の一枚摺物が、いずれも北の新地の舞台と深く関わっていたことを論じたもので、そのうちおそらく肥田氏の絶筆となった「佐藤家の立版古」は、佐藤家史料の価値を語って余りある論稿である。は佐藤駒次郎宛の書信を紹介し、北の新地の舞台が花柳舞踊研究会(二世花

柳寿輔・田中良・遠山静雄ほか)と連動していたことを指摘したものである。

(2) . 大阪四花街の歴史に関する研究

大阪四花街の歴史や地理的展開については、実施期間以前に 「戦前期「北の新地」街並みの復原 竹本住大夫氏、田村富子氏、肥田皓三氏、西川梅十三氏の聞き取り記録と文献史料をもとに」(笠井純一・笠井津加佐、『金沢大学日本史学研究室紀要』3号、2017) 「明治後期における大阪花街の変貌と「春の踊」競演の出現」(笠井津加佐・笠井純一、『人間社会環境研究』34号、2017)を公表している。前者は戦前期の北の新地を直接・間接に知る人士の聞き取り調査と筆者らが蒐集した文献史料をもとに、可能な限り北の新地の景観と特色を紙上に再現しようと試みたものである。後者は、北の大火(1909)・南の大火(1912)後の花街再建にあたり、北の新地では娼妓を全廃し、芸妓中心の花街に転換したこと、南地では「居稼」を全廃し、宗右衛門町を核に芸妓中心の花街を目指すようになったこと、その結果都市「大大阪」の発展と相まって、大正期から「大阪春の踊」が全盛期を迎えたことを、新聞記事や花街の評判記などを史料として詳細に論じた。

期間中の成果としては、「第五回内国勸業博覧会余興「新曲浪花踊」上演と大阪四花街の動向」*(笠井津加佐・笠井純一、2019)がある。第70回東洋音楽学会大会(2019.11.17、京都市立芸術大学)で報告したもので、大阪天王寺で開催された第五回内国勸業博覧会(1903)における余興「新曲浪花踊」の公演を契機として、それまで地歌・地歌舞や義太夫が中心であった大阪四花街に、大阪以外の地で発祥した音曲や舞踊が怒涛のように参入したこと、名古屋西川流の大阪参入がその事実を象徴的に示すことなどを指摘した。

(3) . 大阪四花街の芸能に関する研究

実施期間以前の成果として「「北陽浪花踊」の特徴への試論 作歌者、詞章構成、詞章と視覚表現との関係をめぐって」(笠井津加佐、『人間社会環境研究』31号、2016)がある。踊の作歌者、詞章構成、詞章・振り・舞台装置の関係の三点から、大正末年辺りを境として北陽浪花踊に変化があったことを指摘した。その最も大きなものは振付者の変化(名古屋西川流から花柳流へ)である。

期間内の成果としては、「戦前期大阪花街における「北陽浪花踊」と「堀江この花踊」 踊りの詞章から、それぞれの特色を考える」(笠井津加佐・笠井純一、『人間社会環境研究』38号、2019) 「邦楽における職業意識の再編 日本大阪花街の近代化と女学校教育をめぐって」*(笠井純一・笠井津加佐、『第13届中日音楽比較研究国際学術検討会論文集』2019、同国際シンポジウム(2019.11.24、福州大学)で報告したもの) 「戦前期大阪花街における地歌舞伝承と芸妓の動向 南地大和屋の史料と北陽 佐藤くにの言説を中心に」(笠井純一・笠井津加佐、『人間社会環境研究』40号、2020)の3点がある。 は1934年における「北陽浪花踊」と「堀江この花踊」の詞章を比較し、北陽は作歌者：長田幹彦が、古典に拠りつつ独自の世界を創造したのに対し、堀江の食満南北は、典拠となった作品の詞章を切り取って散りばめる手法を取ったことを指摘した。食満の作風は、古典の世界を眼前の踊りと二重写しに提示するもので、伝統的な「本歌取り」の手法などを髣髴させる。また、戦時下の観客の志向に配慮した可能性もあると論じる。 は、開国と西洋文化の流入に際して圧迫を受けた日本伝統芸能の担い手達が、学校教育を通して復活の途を探る中で、職業人養成教育は花街にも及び、南地大和屋の阪口祐三郎は芸妓養成所を設立し、南地全体としても芸妓の技能試験を定期的実施して、その技量と職業意識の高揚に努めたことなどを指摘した。武原はんは養成所を卒業した代表的な名妓である。の内容は次の通りである。大正初年期頃から、南地以外の大阪花街では地歌舞が殆んど認められないが、南地と北の新地では稽古が続けられていた。南地大和屋に伝わる「稽古帳」

(阪口純久氏所蔵)はその事実を示している。また佐藤くに・武原はん・神崎恵舞らの手で東京に地歌舞が紹介され好評を博した。さらに1935年、南木芳太郎と佐藤駒次郎を中心に北陽演舞場で「上方舞大会」が開かれ、山村流・煤茂都流・吉村流・井上流の舞踊家や箏曲家：菊原琴治ほかの協力も得て、大阪花街に地歌・地歌舞が一時復活したが、戦争の激化によって中断した。大阪花街の芸妓達は様々な舞踊・音曲を摂取する傍ら、自らの心情を投影する地歌・地歌舞の修練を通して、その矜持を保った可能性がある。

(4) 北陽演舞場の研究

大阪北の新地の北陽演舞場は1915年に竣工し、1945年6月の大阪大空襲で灰燼に帰したが、「北陽浪花踊」などを上演する花街の施設であるとともに、大阪市民らが集う場でもあった。また大林組が渾身の力を込めて建てた近代和風建築であり、美術的にも優れた意匠を誇っていた。

この演舞場についての研究成果は、「北陽演舞場という「場」と浪花踊観客の動線 設計図と写真から紙上に復元する」(笠井純一・笠井津加佐・沢田伸、『人間社会環境研究』35号、2018)、「北陽演舞場の改築とその背景 昭和4年、7年の内部改修をめぐって」(笠井純一・笠井津加佐・沢田伸、『人間社会環境研究』37号、2019)、藤田勝也「近代大阪花街の演舞場の建築 北陽演舞場を中心に」(藤田勝也、『関西大学博物館紀要』25号、2019)の3点がある。は大林組から提供された竣工時の設計図をもとに、その平面構成と浪花踊を鑑賞する観客の動線を紙上に復元し、この建築物の特色を追究しようと試みた。は演舞場の二度にわたる改築について、設計図、聞き取り調査結果、番付掲載の写真、新聞記事などから多角的に追究し、1929年の改築は「貴賓席・貴賓控室」の撤去、1932年の改装は「観客席の椅子席化」であり、それぞれの背景には、金融恐慌に象徴される経済状況の悪化、生活様式の洋風化と北の新地観客の特殊性があると論じた。近代大阪の四花街における演舞場が有した建築的特色の実態を明らかにするとともに、北陽演舞場の存在意義を検証することを目的とした包括的研究であり、著者による要約は以下の通りである。(一)大阪花街の演舞場は劇場として特異な存在と見なされていた。(二)演舞場のもっとも顕著な建築的特徴は、充実した待合空間を内包した点にあった。(三)待合空間は、舞台・観客棟と別棟にする場合と、同一建物に収める場合があったが、別棟にするのは木造に顕著であって、また前者から後者へ推移した背景に、木造から非木造へという構造形式の変化が想定された。(四)待合空間を内包するという建築的特徴をもつのは大阪歌舞伎が早い事例であるが、演舞場での普及の要因・背景には、設計・施行した大工中村儀右衛門の存在が垣間見えた。(五)北陽演舞場は待合空間を別棟化した木造による演舞場の典型例であるとともに、一方で大阪北の梅田界限における劇場施設として希少な存在であった。なお著者は、北陽演舞場が花街の演舞場としての特性とともに、市民に開かれた劇場施設としての性格を併せ持っていたことを、具体的事例を挙げつつ指摘している。

以上のように、本研究の成果は多岐にわたるが、北陽演舞場に関する研究を除き、聊か点描的である嫌いを免れない。これは大阪花街研究が緒に就いたばかりであることを如実に示しており、近世大阪における「げいこ」の発祥、近代大阪における政治・経済と花街の関わり、明治期における「南地芦辺踊」の変遷など、追究すべき課題が多々残された。現時点では、不十分ながら大阪花街研究の史資料集積と、橋頭保的な研究成果を残せたことを提示し、本研究の総括に替えたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 笠井津加佐・笠井純一	4. 巻 38
2. 論文標題 戦前期大阪花街における「北陽浪花踊」と「堀江この花踊」 踊の詞章から、それぞれの特色を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笠井純一・笠井津加佐	4. 巻 39
2. 論文標題 戦前期関西における邦楽の発展とその方向性 箏曲家：初世菊田歌雄と小野清友の活動を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 121 - 138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笠井純一・笠井津加佐	4. 巻 89
2. 論文標題 《史料紹介》箏曲家：初世菊田歌雄関係史料	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪の歴史	6. 最初と最後の頁 77 - 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笠井純一・笠井津加佐・沢田伸	4. 巻 35
2. 論文標題 北陽演舞場という「場」と浪花踊観客の動線 設計図と写真から紙上に復元するー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 205-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笠井津加佐・笠井純一	4. 巻 36
2. 論文標題 大阪花街・北新地と舞台美術家：田中良 佐藤家史料をもとにー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 119-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笠井純一・笠井津加佐・沢田伸	4. 巻 37
2. 論文標題 北陽演舞場の改築とその背景 昭和4年、7年の内部改修をめぐってー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 159-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田勝也	4. 巻 25
2. 論文標題 近代大阪花街の演舞場の建築 北陽演舞場を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西大学博物館紀要	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笠井純一・笠井津加佐	4. 巻 40
2. 論文標題 戦前期大阪花街における地歌舞伝承と芸妓の動向 南地大和屋の史料と北陽 佐藤くにの言説を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 135-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笠井純一・肥田皓三・笠井津加佐	4. 巻 41
2. 論文標題 佐藤家所蔵一枚摺物と大阪北の新地の舞台	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 125-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 笠井津加佐・笠井純一	4. 巻 41
2. 論文標題 大阪北の新地舞踊関係史料 佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信 (上)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間社会環境研究	6. 最初と最後の頁 143-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 笠井津加佐
2. 発表標題 北陽浪花踊映像史料の紹介と研究用資料作成の可能性
3. 学会等名 芸能史研究会第56回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笠井津加佐・笠井純一
2. 発表標題 第五回内国勸業博覧会余興「新曲浪花踊」上演と大阪四花街の動向
3. 学会等名 東洋音楽学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笠井純一・笠井津加佐
2. 発表標題 邦楽における職業意識の再編 日本大阪花街の近代化と女学校教育をめぐる
3. 学会等名 第13回中日音楽比較研究国際学術検討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 笠井純一・笠井津加佐（安部聡一郎監訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 上海音楽学院出版社	5. 総ページ数 452
3. 書名 趙維平主編『第十二回中日音楽比較比研究会論文集』	

1. 著者名 笠井純一・笠井津加佐	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福州大学	5. 総ページ数 15
3. 書名 劉富琳編『第13回中日音楽比較研究国際学術研究会論文集』（CD-R版）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村田 路人 (Murata Michihito) (40144414)	神戸女子大学・文学部・教授 (34511)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	飯塚 一幸 (Iizuka Kazuyuki) (50259892)	大阪大学・文学研究科・教授 (14401)	
研究分担者	藤田 勝也 (Fujita Masaya) (80202290)	関西大学・環境都市工学部・教授 (34416)	
研究分担者	笠井 津加佐 (Kasai Tsukasa) (90747114)	金沢大学・人間社会研究域・客員研究員 (13301)	
研究分担者	塚原 康子 (Tsukahara Yasuko) (60202181)	東京藝術大学・音楽学部・教授 (12606)	
研究分担者	岡田 万里子 (Okada Mariko) (60298198)	桜美林大学・リベラルアーツ学群・准教授 (32605)	
研究分担者	田村 義也 (Tamura Yoshiya) (80262096)	成城大学・その他・非常勤講師 (32630)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大西 秀紀 (Onishi Hidenori) (60469111)	京都市立芸術大学・その他・研究員 (24301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	沢田 伸 (Sawada Shin)	兵庫ヘリテージ機構・世話人	
研究協力者	岡田 万里子 (Okada Mariko) (60298198)	桜美林大学・リベラルアーツ学群・準教授 (32605)	
研究協力者	田村 義也 (Tamura Yoshiya) (80262096)	成城大学・その他・非常勤講師 (32630)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関